

白井 (2008)『外国語学習の科学』
外国語を身につけるために
—第二言語習得論の成果をどう生かすか—
(1)

第二言語習得研究概論a
2011年前期 稲垣 俊史

言語教授法／学習理論の歴史 (Q1, Q2)

- ▶ 中世: 文法訳読式教授法 (Grammar Translation Method): ヨーロッパのラテン語教育
- ▶ 19世紀: 文法訳読式教授法: フランス語、ドイツ語、英語などの現代外国語教育
- ▶ 1940~1960年代: オーディオリンガル教授法 (Audiolingual Method)
 - 構造主義言語学 (structural linguistics): 「個々の言語は互いに限りなく異なりうる」という信念のもとに、諸言語の音声、文法体系を分類、記述した。
 - 行動主義心理学 (behaviorism): あらゆる学習は刺激-反応 (stimulus-response) の連鎖が強化 (reinforcement) されることによっておこる習慣形成 (habit formation) であるとした (e.g., Skinner, 1957)。

言語教授法／学習理論の歴史 (続き)

- 上記の言語学、心理学の理論を背景に、L1とL2の比較 (対照分析 [contrastive analysis]) をして、違いのあるところを徹底的にドリル (パターン・プラクティス) し、L2の新しい「習慣」を身につければL2はできるようになる、という考えに立った教授法。
- 誤用 (error) は母語の古い習慣がL2学習に干渉して起きるもので「排除すべきもの」として直ちに訂正される。
- その後下火に: 1) 理論的基盤をなくした、2) なかなか実際にL2を使えるようにならなかった、3) 実際にデータをとってみると、対照分析仮説が支持されない場合があり、また、母語の影響ではない発達上の誤用も見られた (goed, おいしいじゃない)。

言語教授法／学習理論の歴史 (続き)

- ▶ 1950年代後半~: ノーム・チョムスキー (Noam Chomsky) による (変形) 生成文法 ([transformational-]generative grammar)
- Chomsky (1959) の Skinner (1957) の書評: 構造主義言語学、行動主義心理学批判
- 生得的言語習得観 (innatist position): 人間には何らかの言語習得装置 (LAD) が生まれつき備わっており、母語習得はそれをもとに行われる。
- 言語習得装置 (LAD)・普遍文法 (UG) の解明を目指す。

言語教授法／学習理論の歴史 (続き)

- ▶ 1970年代～: コミュニカティブ・アプローチ (communicative approach, communicative language teaching [CLT])
- ヨーロッパで誕生: Wilkins (1976) の概念・機能シラバス (notional/functional syllabus)
- 「言語の形式に焦点をあてるのではなく、言語の意味、すなわち、言語を使ってメッセージを伝える」ことに学習活動の重点をおき、コミュニケーション能力 (Canale & Swain, 1980; Hymes, 1970) の習得を目指す教授法 (Widdowson, 1978)。
- SLA研究からの支持 (例. Krashen & Terrell (1983) のNatural Approach)

5

SLAの誕生: Corderと誤用分析 (Q3, Q4)

- ▶ 1960年代後半～: 誤用分析 (error analysis) (Richards, 1974 参照)
- ▶ Corder, P. (1967). "The significance of learners' errors"
- 当時の言語学 (Chomsky) やL1習得研究 (Brown) の影響を受け、L2習得プロセスそのものを研究することの必要性を唱える。
- 初めて学習者に目を向けた (teaching から learningへ)、つまり「SLAの誕生」を意味した。

6

SLAの誕生: Corderと誤用分析 (続き)

- ▶ Corder (1967) の主張:
 1. 誤用は学習者言語の体系の現れで、そこからL2習得プロセス／メカニズムが垣間見える。
 2. 誤用は学習している証拠で、習得過程において避けられない、必要不可欠なもの。
 3. L1の影響は干渉でなく、学習者の学習ストラテジーの一つととらえるべき。
- ▶ 「誤用の意義」(Corder, 1967, p. 167): (教師)学習者の到達度がわかる、(研究者)習得過程がわかる、(学習者)学習の手段。

7

SLAの誕生: Corderと誤用分析 (続き)

- ▶ 誤用分析の問題点
 - 回避 (avoidance) (Schachter, J. 1974. "An error in error analysis")
 - 誤用のみでは全体像がわからない
 - 誤用の原因認定の問題 e.g., *No play baseball, 新しいの仕事*

8

SLAの誕生: Selinkerと中間言語 (Q5, Q6)

- ▶ 1970年代前半～: 中間言語 (interlanguage) 分析 (Selinker, 1969, 1972)
- ▶ 誤用だけでなく正用も含め、学習者言語の全体像に迫る。
- ▶ 中間言語とは？
 - L1とL2の「中間」に位置するが、L1ともL2とも違う独自の体系 (unique system) を持った自然言語 (natural language) の一種 (cf. Corder, 1971)。
 - 母語、目標言語、発達上の要因の影響を受けた体系。
 - 発達とともに変化する動的 (dynamic) 体系。
 - 発達上の一地点においてもタスクなどの要因で変異する (variable) 体系。

9

SLAの誕生: Selinkerと中間言語 (続き)

- ▶ 化石化 (fossilization) (Selinker, 1972):
中間言語においてある項目の発達が停滞し、それ以上変化しなくなる現象。いくら指導を受けても、いくら意識的に努力して変化しなかったり、変化したように見えても、(何らかの条件下で)再び元の形式が現れたりする。

10

7. 習得順序研究における、習得順序と発達順序の違いは何か？

- ▶ 習得順序 (acquisition order): 様々な異なった文法項目 (例. 形態素) を習得する順序 (p. 14)
- ▶ 発達順序 (developmental sequence): 特定の言語構造を習得する際に学習者がたどる道筋 (e.g., 疑問文、否定文、語順、関係節)
- ▶ L2学習者は母語、年齢、学習環境に関わりなく一定の発達段階をたどるとされる。

11

発達順序の例

- ▶ 英語否定文の発達順序 (Schumann, 1979):
No play baseball => John [no/don't] play baseball => John can't play baseball => John doesn't play baseball
- ▶ 英語疑問文の発達順序 (Pienemann et al., 1988):
Your cat is black? => Where your cat is? => Is your cat black? Where is your cat? => What is your cat doing?

12

発達順序の例(続き)

- ▶ (中国語話者による)日本語否定文の発達順序(家村 2003):
(多様な否定形)*学生だない、*静かくない、*安いじゃない、*書くない => (動・名・ナ形の習得)学生じゃない、静かじゃない、書かない、*安いじゃない(*安くじゃない、*安いくない) => (イ形の習得・ナイの活用)安くない、書かないで、書かなければ
- ▶ 日本語のテイルの発達順序(Shirai & Kurono, 1998; 菅谷 2005):
走っている(動作の継続) => 割れている(結果状態)

13

8. マンフレッド・ピーネマンの処理可能性理論・教授可能性仮説とは何か?

ZISAグループによるドイツ語の語順のL2発達段階の発見 (Meisel et al., 1981)

発達段階	例	可能な操作
1. SVO	I drank a glass of milk.	[W X Y Z]
2. 副詞前置	*There children play	[W X Y Z]
3. 動詞分離	All children <u>must</u> the break <u>have</u> .	[W X Y Z]
4. 倒置	Then <u>has</u> <u>she</u> the bone brought.	[W X Y Z]

Pienemann (1984): 1~3段階にいる学習者に4段階の構造(倒置)を教えた。指導前にS3にいた学習者のみ倒置を使うようになった。

14

教授可能性仮説 (Teachability Hypothesis) (Pienemann, 1984)

- ▶ 指導は、学習者が発達上目標構造が習得される直前の段階まで達している場合のみ有効である。
 - 指導は、学習者が発達上目標構造を習得する準備ができていない時のみ効果がある。
 - 学習者は、指導を受けても発達段階を飛び越えて目標構造を習得することはできない。
- => 処理可能性理論 (Processability Theory) (Pienemann, 1999): 学習者が特定の発達段階で処理できる文法操作は限られており、発達順序はこの言語処理上の複雑さにより決まる。

15

処理可能理論 : 日本語への適用 (Kawaguchi, 2005)

発達段階	英語	日本語
1. 決まり文句	How are you?	こんにちは
2. 語	played	遊んだ(語彙形態素)
3. 句	many dogs	着てみる(V-te V) 昨日は私が行った(付加詞の話題化)
4. 文	John comes	この手紙は私書いた(O-wa SV) 魚が猫に食べられた(受身) たみ子は娘にケーキを作らせた(使役)
5. 複文	Mary came here, didn't she? I wonder where Mary is going.	

16

9. 習得順序研究の第二言語の教師や学習者に対する重要な示唆とは何か？

- ▶ *Kei play tennis well, When the train leave?, おいしいじゃない、新しいの車*

(教師1): いちいち直す。なかなかできるようにならない。いらだつ。どうして？生徒が悪い？自分の教え方が悪い？(学習者): 直されてばかりでいや！英語(日本語、先生)なんて嫌い！情けない... 私ってバカ？

(教師2): いちいち直さない。習得が進んでいるとわかってうれしくなる。適宜誤りに注意を促す。(学習者): 進んでコミュニケーションしようとする。英語(日本語、先生)好き！上達を感じてうれしい。もっと頑張ろう！

☞ 外国語の教師がSLAを知ることは重要！

17

10. 学習者言語の可変性とは何か？これを引き起こす要因は何か？

- ▶ 中間言語の可変性・変異性 (variability):
タスクの違いにともなう形式への注意の違い (Tarone)や社会的要因(話し相手との距離、話す内容) (Beebe) などにより、学習者言語が異なった形で現れること。

18

教えること(指導、教授)の効果 (effect of instruction) をめぐって :Ellis, Long vs. 白井 (Q11, 12, 13)

- ▶ 教えることで効果はあるのか“Does instruction make a difference?” (Long, 1983)
- ▶ Ellis (1990); Long (1983, 1988): 教えることは習得・発達順序を変えることはできないが、習得のスピードを速め、最終到達度を高める効果がある。

19

教えること(指導)の効果 (effect of instruction)をめぐって:Ellis, Long vs. 白井(続き)

- ▶ 白井:
 - 習得・発達順序が決まっているコアの文法項目(発達の項目 “developmental features” 例. ドイツ語語順規則)と、教えればすぐに使えるような文法項目(変異的項目 “variational features” 例. He (is) my friend)があるのでは (Meisel et al., 1981)。
 - どの項目が教えたらすぐ効果があり、どの項目が教えてもすぐには習得できないかを解明する必要あり。
 - 教授により学習者の志向が変わる (Meisel et al., 1981)。つまり教授により形式的正しさに注意を払うようになり、言語発達が促進される。

20

参考文献

- ▶ Canale, Michael & Swain, Merrill. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics* 1(1), 1-47.
- ▶ Chomsky, N. (1959). Review of *Verbal behavior* by B. F. Skinner. *Language*, 35, 26-58.
- ▶ Corder, P. (1971). Idiosyncratic dialects and error analysis. *International Review of Applied Linguistics*, 9, 147-159.
- ▶ Ellis, R. (1990). *Instructed second language acquisition*. Oxford: Blackwell.
- ▶ Hymes, D. (1970). On communicative competence. In J. J. Grumperz & D. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- ▶ 家村伸子 (2003). 「日本語の否定表現の習得過程-中国語話者の発話資料から-」『第二言語としての日本語の習得研究』6, 52-69.

21

参考文献(続き)

- ▶ Kawaguchi, S. (2005). Processability Theory and Japanese as a second language. 『第二言語としての日本語の習得研究』8, 83-114.
- ▶ Long, M. H. (1983). Does second language instruction make a difference? A review of research. *TESOL Quarterly*, 12, 359-382.
- ▶ Long, M. H. (1990). Instructed interlanguage development. In L. M. Beebe (Eds.), *Issues in second language acquisition: Multiple perspectives* (pp. 115-141). New York: Newbury House.
- ▶ Pienemann, M. (1984). Psychological constraints on the teachability of languages. *Studies in Second Language Acquisition*, 6(2), 186-214.
- ▶ Pienemann, M., Johnston, M., & Brindley, G. (1988). Constructing an acquisition-based procedure for second language assessment. *Studies in Second Language Acquisition*, 10, 217-244.

22

参考文献(続き)

- ▶ Pienemann, M. (1999). *Language processing and second language development: Processability Theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- ▶ Richards, J. C. (Ed.). (1974). *Error analysis: Perspectives on second language acquisition*. Essex: Longman.
- ▶ Schachter, J. (1974). An error in error analysis. *Language Learning*, 24, 205-214.
- ▶ Selinker, L. (1969). Language transfer. *General Linguistics*, 9, 67-92.
- ▶ Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-231.
- ▶ Shirai, Y., & Kurono, A. (1998). The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning*, 48/2, 245-279.
- ▶ Skinner, B. F. (1957). *Verbal behavior*. New York: Appleton-Century-Crofts.

23

参考文献(続き)

- ▶ 菅谷奈津恵 (2005) 「日本語のアスペクト習得に関する研究の動向」『言語文化と日本語教育』2005年11月増刊特集号(『第二言語習得・教育の研究最前線』), pp.39-67.
- ▶ Widdowson, H. G. (1978). *Teaching language as communication*. Oxford: Oxford University Press.
- ▶ Wilkins, D. A. (1976). *Notional syllabuses*. Oxford: Oxford University Press.

24